

生き方リサーチ

豊かだけど不安な中で

2007年問題は男問題？

世に言う「2007年問題」、たった3年分の誕生日で約700万人、総人口の約5%を占める「団塊世代」（1947年～1949年生まれ）が60歳を迎え始め、サラリーマンの定年退職が始まることから発生すると騒がれている問題だ。何が問題なのかと言えば、「製造現場での技術継承の断絶」や「一気にぼ

っかり抜ける人材穴埋めの難しさ」、「年金等の社会保障の危機」など、企業経営や社会保障の問題が心配されている。その対象となる「ものづくり」に携わる人は、第二次産業就業者比率でみると26・1%（2005年国勢調査）、高度経済成長期を終える1975年の調査以降、低下を続けてこのまま下がってしまった。ここで、さらに生産現場のペテランたる団塊世代が抜けるとなると、確かに日本のものづくりの先行きに不安が募る。また、人口減少時代が昨年からはじまった日本で、サービス産業という内需型経済構造に偏ることは、やはり将来への大きな不安点だ。しかし、本当に団塊の世代の働き手たちは、一斉に仕事の場から姿を消そうとしているのだろうか？ 現役から引退しようとしているのだろうか？

こうして騒がれている2007年問題は、企業経営や経済・財政など、どれも「男の問題」ばかりだということに気づく。しかし、団塊世代700万人の約半数は女性だ。団塊女性の2007年問題は無いのだろうか。会社人間生活からフリーになるサラリーマン男性と、子どもや家族の世話から解放されてフリーになる団塊女性たちとの間には、明らかに「フリー」へのうれしき、前向きさ、食欲さに違いがあるようだ。それは遊びに、仕事に、学びにと、街で元気に動き回っているのが誰かを探せば明らかだ。毎日の暮らし、生き方の周辺に、元気で前向きな「女の2007年問題」が潜んでいるのだろうか？ 今回、このような視点から「もうひとつの2007年問題」を探ってみよう。

家族・生活・仕事

「ニューマンルネッサンス研究

と個人生活の優先度について、現状と理想を尋ねた質問だ。ここで特徴的だったのは団塊女性の結果だ。現状、理想共に他の年代層に比べて「仕事重視（仕事重視派）」の比率が高い。

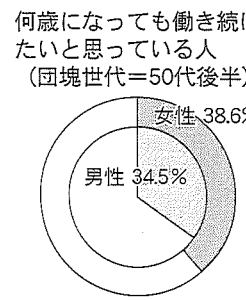
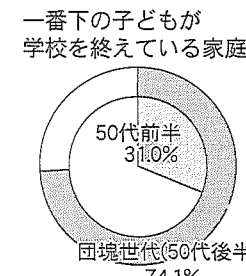
研究者（HRI）では、今年2月に「10年後の社会と生活」に関するアンケート調査を実施した。20歳から64歳までを5歳ずつ区切り、それぞれ男女各200名、合計3600名を対象にウェブ上から調査した。まだ、十分な分析や考察をし終えていないが、今回は50歳代後半（団塊の世代）の結果に注目して、速報として読み解いてみたい。

まずは、調査対象者の団塊世代の家族を見てみよう。すでに74・1%の家族で、一番年下の子どもが最終学校を卒業し終えている。高校卒業で見たら約90%だ。直前の50代前半の人たちの家族を見ると、まだ31%しか子どもが学校を終えていない。団塊世代の家族は、子どもが巣立ち、エンブティ・ネスト家族がスタートしたばかりという家族

が多そう。回答者の現時点での就業状況を見ると、男性は88・5%、女性は41・5%が仕事に就いている。国勢調査の労働力率と比較すると、女性の就業率が低めであるが、「いつまで仕事を続けたいか」という質問に対して、「定年退職を直前に控えているにもかかわらず、「何歳になっても働きたい」と答えた人は、男性で34・5%、女性で38・6%にのぼった。逆に「できるだけ早く退職し、悠々自適の生活を送りたい」と答える人は、男女ともに13%程度。特に男性が他の年代に比べて圧倒的に低いのが特徴だ。いわゆる2007年問題に対して楽観的になってくる。

最近話題となっている「ワーク・ライフ・バランス」の観点からも見てみよう。仕事と個人生活の優先度について、現状と理想を尋ねた質問だ。ここで特徴的だったのは団塊女性の結果だ。現状、理想共に他の年代層に比べて「仕事重視（仕事重視派）」の比率が高い。

団塊男女 勢いに格差



団塊世代がこれから10年間にやりたいこと、不安に思うこと (数字は%)

やりたいこと	順位	不安なこと	
		男性	女性
趣味やレジャーの充実	1	87.0	88.7
体力と健康な心身	2	76.5	63.5
知識、教養、技術の交流	3	47.5	60.4

生活の満足度 (数字は100点満点の点数)

	調査者全体		団塊世代 (50代後半)	
	男性	女性	男性	女性
個人生活	60.9	63.5	64.6	66.4
家庭生活	61.5	65.5	64.6	67.4
仕事生活	54.4	56.9	57.9	57.4

代でも1位は「趣味や旅行などレジャーの充実」となる。特徴は、団塊世代の2位にランクされる「体力をつけ、健康な心身づくりに励む」の結果だ。全体の平均が46・1%なのに対し、団塊女性では67%の人が1〜3位の中に「体力と心身の健康」を入れていく。対する団塊男性は52・5%で、前後の50代前半や60代前半の人たちよりも少ない。これは、体力への自信なのだろうか。

女性性の団塊世代以外の年代層では、過半数以上が現状「生活重視」であり、仕事重視は25・30%程度だ。しかし、団塊女性ではこの比率が逆転（仕事：54・2%/生活：27・7%）している。さらに、「仕事重視」を理想とする比率も、他の年代の女性が10%台であるのに対し、団塊女性は25・3%と突出している。かたや団塊男性に目を転じると、他年代の男性に比べて現状では生活重視派がやや多く、理想としては生活重視派がやや少ないという結果である。はつきりという結果である。望みも不安も体力と健康。次に、今後10年間にやりたいことを尋ねた結果を見てみる。1位から3位までの累積比率の順位を見ると、どの年

崩壊後の激動の時代にも、なんと波頭で踏ん張り、波にのまれずに安全な岸にたどりつこうとしているようだ。変化を起こす闘う世代として学生時代を過ごし、ライフスタイルに新しい変化を持ち込んだ団塊世代だが、坂の上まで登りつめた今、変化よりも、このままの勢いで「ゴールへ」という願いの表れなのかもしれない。

2007年問題

このように団塊世代を中心に今回の調査結果を見てみると、一括りの団塊ではなく、男女の差があまり出されて見えてくる。そして、もう一度「2007年問題」に戻ってみよう。

（オムロン・ヒューマンルネッサンス研究所 中間真一）